

土佐日記 帰る前の守・慕ふ国人

紀貫之

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとて、するなり。その年の、十二月の、二十日あまり一日の日の、戌の時に門出す。そのよし、いささかに、ものに書きつく。

或人、県の四年五年はてて、例のことどもみなし終へて、解由など取りて、住む館より出でて、船に乗るべき所へ渡る。かれこれ、知る知らぬ、送りす。年ごろ、よく

比くらべつる人々なむ、別わかれ難がたく思おもひて、日しきりに、とか
くしつつののしるうちに、夜ふけぬ。